

新しいコミュニティを創り、  
明るい時代を拓く。



社会福祉法人 拓く 本部長 浦川 直人

2020年はコロナ禍、自然災害に見舞われ、事業運営が何事も「今まで通り」とは異なりました。一方で、法人の「強み」を実感し、一歩一歩前進した年でもあります。9月大型台風の際は、筑後川が氾濫するのではと緊迫した状況で、鉄筋コンクリート造2階建ての「出会いの場ポレポレ」「ニュンバ」を開放し、在宅に不安を覚える利用者や家族の避難を受け入れました。暴風雨の中、肩を寄せ合い誰もが安堵の表情に。その支え合う姿に法人の底力を実感しました。

11月、軒並み市内のイベントは中止でしたが、「ポレポレ祭り」を開催。反対意見があつても、祭りを楽しみにしている子どもや地域の方々、障がいのある利用者のために決断。私は、20代の橋本さんとお笑いコンビを組んで初挑戦へ。彼の独創的なギャグの魅力をどうにか引き立た



(写真・上) 12月 イルミネーション点灯 (表紙参照) (2段目左・右) 点灯式 保護者会の有志による温かい豚汁、コーヒーのおもてなし。

## 社会福祉法人拓く

1970年代より久留米市で展開した障がい児の保護者と教員による統合教育運動が原点。2000年10月法人設立。障がいが重くても誰もが地域で暮らすために「コミュニティづくり」に取り組んでいます。

**事業所** 出会いの場ポレポレ・夢工房・グループホーム・ポレポレ居宅介護支援センター  
出会いの場Leo・相談支援センターカリブ・久留米市西部障害者基幹相談支援センター

## 拓く通信

2021年3月号(年2回発行)

発行・社会福祉法人 拓く 法人本部

〒830-10071

福岡県久留米市安武町武島468-12

TEL

0942-127-2039

活動を更新中!

!

拓くウェBSITE QRコード

# 拓く通信



サービス依存から人的資源へ 転換のとき  
未来の「私たちのこと」を考える

### 理事長メッセージ⑥ 社会福祉法人拓く 理事長 馬場 篤子

2021年の年明けの日本をコロナの猛威が再び襲い、政府は2度目の緊急事態宣言を発令・解除。先が見えない状況ですが、立ち止まってはいられません。「前へ前へ」が私たちの姿勢です。外出自粛で、リモートワークやリモート学習が普及し、テイクアウトやデリバリーを始める飲食店も増加。反面、今後はどんな職業が生き残り、どんな職業が誕生するのか。収入が減っても、年金や社会保障制度は続くのか。次波が来る度に「営業時間の短縮要請」と「給付金支給」のセットで、政府がいくら支援したとしても、本末転倒の感はぬぐえません。国を頼れずの時代、天災・疫病を前にして先人はどう立ち向かったのでしょうか。今こそサービスにすがるのではなく、一人ひとりがつながって知恵と力を絞り出すときではと意を強くしています。

昨年はどの団体も、恒例のイベント、クリスマスの集いが無し無しの連続。12月の安武町は街灯も少ないので、夜は真っ暗になります。そこで、「ポレポレを派手に、イルミネー

ションで飾ろう」とスタッフが奮起。ライトも持たず未経験なので、町内の人達に相談したら沢山のライトと共に指南役としてご登場、保護者も加わって玄関前を飾り終えました。点灯式の日は凍える寒さでしたが、利用者のお母さんが振る舞う豚汁もあって、ライトの明るさと人の温かさが重なり、幸せな気持ちになれたものです。これが、「人的資源」とつながってきた、私たちの強みです。

いよいよ本格的に、一人ひとりが本気になって「私ごと」だけではなく、未来の「私たちのこと」を考えるときなのです。すでに行政の皆さんや「チェックプロジェクト」「10万人女子会」「本業+α」といった団体と一緒に、3つのプラットフォームをつくり、1年間摸索してきました(次号掲載予定)。サービス依存とならず、法人の一つひとつの事業も地域の資源にさらに目を向けて、「人」「企業」「空き家」「農地」活用への方向転換を図っていきたいと思います。

(写真) 2020年12月18日・22日 イルミネーション点灯式

### CONTENTS

- 「Leo」と「ぶらっと」が織りなす物語 ..... 2・3
- 施設外就労 次の一歩へ ..... 6
- 新しいコミュニティを創り 明るい時代を拓く ..... 8
- 「地域食堂」と「直売所」担い手誕生物語 ..... 4・5
- 第19回ポレポレ祭り報告 ..... 7

# 子どもも保護者も、次のステップへ

出会いの場Leo 管理者 溝尻 博子

「ただいま！」「おかえりなさい！」

午後、「出会いの場Leo」(以下・Leo)に8人の子ども達がお散歩から戻ってきました。笑顔で迎えるのは、隣りの「ぶらっと・荘島」(以下・ぶらっと)に立ち寄った大人達。その笑顔を見て子どもたちも嬉しそうです。8月開所から現在、10名定員に登録者22名。子どもたちはもちろん、保護者の意識が変化したように思います。登所を契機に、疎遠だった家族に送迎のお願いをしたり、地域の保育園を探し始めたと、次のステップに踏み出しています。

それはオープンスペース「ぶらっと」の併設による相乗効果もあって、好循環が生まれているから。2事業所の仕切りは引き戸一枚なので、開けると一続きの空間、子どもと保護者はお互いが見えてここにこ顔です。年代物のカウンターも活躍しています。送迎時に保護者もそこで一息ついてお茶を飲んだり、保護者同士並んで家庭の話をしてみたり、きっと誰もがそこに座るとエネルギーを補給できるのかもしれません。また、「ぶらっと」には、障がいのある子ども、保護者だけ



## 出会いの場Leo

「ぶらっと」の引き戸を開けるとそこは「Leo」。少し引き戸を開けて我が子の様子を見学する保護者も。

ではなく、ご近所さん、施設のリノベーション協力者などがふらりとお茶を飲みに来ます。お客様が子どもと遊んだり保護者が店番をしたりと、「Leo」と「ぶらっと」が一体となって、様々な出会いとつながりの物語が生まれつつあります。

私たち保育士も意識が変わってきました。以前、児童発達支援センターで働いていた頃、子どもや保護者と深く関わっていたつもりでしたが、自分達との関わりが中心で、サービス重視に目を向けていたような気がします。子どもが様々な世代の方々と触れ合うこと、地域の保育園に入園して同年代の子ども達と共に過ごす時間をもつこと、その大切さを保護者の皆さんに伝えたいと思います。

## 「ひと」と「ひと」がつながる場をめざして

秋満 美沙子

「ぶらっと」のカウンター席に座った「Leo」利用者の母親が、時折、ぱつりぱつりと言葉を探すようにして話しあります。横で耳を傾ける先輩親が、「今まで一人で、よく頑張ってきたね。きつかったね。えらい！」と、にっこり。声かけに、母親が涙する場面を何度も目にしました。誰にも話せなか

# 「Leo」と「ぶらっと」が

昨年10月、児童発達支援事業「出会いの場Leo」の併設  
サービスは重ねずに、  
2つのプラットフォームが交錯しながら、

ったことを言葉にして、「ひと」に初めて認めてもらえたという喜びが見て取れて、暗かった心の中に、小さな灯りがともったのではと思います。

「ぶらっと」は、「ひと」と「ひと」がつながり合えるプラットフォーム。社会の中で孤立しないように誰かとつながる場を作っていくたいと願い開所しました。私は「バーテンダー役」を務めています。30数年、企業の事務員として働いていましたが、ママ友であり20年来の飲み友達でもある「久留米市手をつなぐ育成会」の藤野事務局長に誘われ、オープンスペース立ち上げの集まりに参加しました。そこで、「人をつないでいく役目が必要ね。あなたがぴったり」と、皆さんの溢れんばかりの情熱という大きな渦にあっという間に飲み込まれて、気づけば、翌日から立ち上げに向けて奔走する私がいました。

「ぶらっと」は開所から半年が経ちましたが、まだ運営主体が決定せず、会則もないという発展途上の団体で、未知数の可能性がおもしろいところです。貸部屋を使用して、「育成会」や「輪をつくろう」、引きこもりの家族会「虹の会」「本業+α」などの団体グループによる定期的な集まりが徐々に開かれるようになり、毎日のように新たな出会いが生まれて、「ひと」と「ひと」がつながっていきます。時にはつまずきながらも、支え合い、新しい縁を紡いでいきたいと思います。



ダウン症の小学5年生の男子が「ぶらっと」に遊びに来ました。「Leo」の子ども達と遊んで、「おんぶしたい！」と。二人の素敵なお笑顔を撮影しました。



積雪の中、運転に気をつけながら、「絶対行かせる！」との母の思いが伝わりました。大雪の2月、何キロも自転車をこいで登所されました。

子ども達は「ぶらっと」の大きな黒板とカウンターに座るのが大好き。「Leo」のお迎え後、保護者と先生はお絵描きする子どもを見守りながら談笑します

## 織りなす物語 その①

として、オープンスペース「ぶらっと・荘島」が開所しました。  
支え合いを重ねていこう。  
「ひと」と「ひと」とのつながりが織りなす物語です。



# 「地域食堂」と「直売所」 担い手誕生物語

その①

当法人は、公益事業の一環として(一社)ほんによかね会の活動に参画。

「JAくるめ安武農産物直売所そらまめ」の活動を、これからも持続可能なものにしなければ—。

2021年春、その担い手になろうと手を挙げました。

## 僕たちが「地域食堂」を発展させます

出会いの場ポレポレ 管理者 小川 真太朗

「ほんによかね会の会員になります! 地域食堂の切り盛りを、一緒にさせてください」

2021年1月、当法人は同会に正式に申し出ました。地域食堂は昼食を提供する会員制の食堂です。熟年の有償ボランティア12チームが食事を提供し、地域の方々も「頑張って作ってくれるなら、食べに来なくてはね」と支え合う関係です。

2009年「三原さん家」を原点として始まった地域食堂ですが、采配を振るってきた皆さんも歳を重ね、次の担い手を模索中。ひょっとして、法人の僕たちが役に立てるのでは。ふと浮かんだのは通所利用を休みがちの納富さんの顔です。そこで、思いきって食堂の皆さんと一緒に働いてみたらと考えました。

同会より請け負った仕事は、地域食堂での調理と接客、片付け清掃です。昨年6月からJAくるめ女性部「まごころ」の



3人にお願いしての試運転。5人の障がいのある利用者とスタッフによるたどたどしいチャレンジで、食事運びも皿洗いも慣れないし、盛り付けもうまく手が動かない、といった「まだまだ」ばかり。それでも、食べ終えたお客様から、「今日ありがとうございます」「頑張っているね」と声をかけられて、納富さんも嬉しそうな表情です。めきめきと覇気が出て休むことは少なくなりました。

いよいよ2月より週5回の本格的な運営が始まりました。大勢が集う食堂内で、ポレポレの利用者が料理の大先輩らの叱咤激励を受けながら立ち働き、休憩時間に自分たちのお手製の料理を食べています。次に挑むのは、彼ら自身が「献立を決める」「お金の集計をする」こと。実現する日が必ずやってくると信じ、僕らが作り手となり食べ手となって、さらに地域食堂を発展させたいと夢を膨らませています。



## 地域食堂の会計は、 私たち「ママチャレ」が担います

(一社) ほんによかね会 廣松 麻奈美

私は直売所の会計を担当しています。そして今、「地域食堂の会計をしてみない?」と、ママチャレの仲間を誘っています。地域に役立つ仕事を一緒にしたいと心から思うようになったからです。ママチャレとは、2017年に実施された厚労省モデル事業「3カ月ママチャレンジ」のこと。私には4人の子どもがいます。当時、2番目が小学校に入学し、おとなしいので集団生活になじめるのか悶々としていました。そんな時、同事業の参加者募集を知り、「自分を変えたい」と申込みを。安武町で暮らす親子6人の核家族、不安をこぼせる相手が少なく孤独だったのでしょう。4年経った今、ママ友も増えて、「一人じゃないんだ」「一人では何もできないのだ」と。これが実感です。

私も「直売所のレジ、手伝ってくれない?」と誘われた一人です。ママチャレ参加後のことと、週末はゆっくりしたいし、子どもの習い事の送迎があるし、それに家族の時間も大切にしたい、と負担に思える時もあったのですが、いつの頃からか、毎週土曜の朝7時には家を出て直売所の開店準備をし、閉店まで残り、売上計算をする自分がいるのです。その理由は、「頼りにされている」「多世代と混ざり合っていいな」「お客様の喜ぶ顔が見たい」など、たくさんあります。そして、この思いをママチャレの仲間に伝えて、週5回の開店になった地域食堂の会計と一緒に務めたいと思うようになりました。

同時に、新しい試みも浮かびます。高齢で運転が無理になった常連さんが通えないらしい。食事を届けられないだろうか。子育て世代の家庭にも。下校時間に合わせて店内に駄菓子屋を開き、子どもたちの見守りができるだろうか。どれも一人ではできないけど、きっとママチャレの仲間とならやれる、そう信じて、声をかけ続けていきたいと思います。

※…若い世代の地域レビューを促すプロジェクト



## 切り込み作業

3時間で  
約160名分の材料を  
切り揃えます

# 施設外就労 次の一歩へ 企業から必要とされる存在に。

昨年より、店にこだわった就労継続事業から「施設外就労」に移行。  
数名の利用者のグループが、スタッフと一緒に企業へ出向いて仕事をしています。  
真摯に技術を磨き、奮闘の日々です。

社会福祉法人 拓く 統括本部長 北岡 さとみ

現在、企業の中で働くという新たなチャレンジを始めています。実感したのは、企業と私たちのスピード感の違い。パン、惣菜、カフェの3店舗を運営してきた経験もありますが、現場では予定変更や手順が毎日異なるのが当たり前。厳しいご指摘もいただきながら、日々、改善に取り組んでいます。

当法人は開所以来、障がい者と地域住民が自然に出会える場所を作るために3店舗を運営していました。その原点は1994年、前身の無認可時代に中心商店街へ出店したこと。大半の人にとって、障がいのある人が店で立ち働く姿を思い描けなかった時代だと思いますが、障がいのあるなしにかかわらず、「働く」ことは「収入を得る」「役割がある」「社会参画」など、欠かせない暮らしの営みなのです。

4半世紀経って時代は移り変わり、昨年末までに3店を閉店。将来を見据えて、「障がい者が地域で働く」スタイルを見直そうと、「施設内就労」から「施設外就労」に移行しました。現場では、スタッフ自身が仕事を習得すると同時に利用者にとっての環境整備を考える必要があり、倍の力を求められます。さらには、時間内に企業が期待するレベルのものを確実に作ることが求められますので、それができなければ、もちろん報酬を得ることができません。しかし、確実にやり遂げたら、利用者も社会の一員として働いているという大きな自信につながります。そのためには細かい手立てと訓練の積み重ねが必要です。

今後、企業の方々に認められ、必要とされる存在になること、利用者一人ひとりが「会社で働けてよかった」「工賃がアップした」と満足できること、そして、お互いに支え合い、信頼し合える関係になることが目標です。平易な道のりではありませんが、まだ始まったばかり。一歩一歩進んでいきたいと思います。

## 食器洗浄

4人で1時間程度、  
約160名分を  
洗います。

## 2月より始まつた 館内清掃

台拭きや床掃除など  
食堂掃除を  
担当しています。

## 第19回ポレポレ祭り 報告



ポレポレ祭りはプラットフォーム  
新たな一歩を踏み出そう

2020年11月6・7・8日、「第19回ポレポレ祭り」を開催しました。  
コロナ禍にあっても継続することで、従来のつながりを大切にし、新たなつながりも創りたい。  
新型コロナウイルス感染防止のため規模を縮小、完全予約制で実施しました。

防災クイズとじゃんけん大会 (右)橋本さん NPO法人コーヒータイム 理事長

ポレポレ祭り 総務 浦川 直人

「みんなで防災テーマのクイズを考えてきました！」

今回も東北の被災地、福島県浪江町から橋本さんが駆けつけてこられました。10年連続の出店をされ、祭りと共に創る一員です。また、「この祭りは勉強になるから」と、知人の若い弁護士の方も東北から同行。ポレポレ祭りが縁となってつながりが生まれ、橋本さんたちの学びのプラットフォームになっているだと気づかされました。

今回のテーマは、「子ども・大人防災まつり」。地震、風水害など災害多発の時代を迎えることを想定し、「防災」のキーワードを掛け合わせました。

通常であれば、5千人の来場者で会場が埋め尽くされる祭りです。しかし、コロナ禍の中、予約制で開催。当初は予約が殺到したら、と議論もしましたが、近隣の小中学校にチラシ配布をしても申込が増えません。完全に慢心でした。初回開催の際でも、千人以上の規模となり活気があったと聞きます。何が足りないのか。一から考え直して一歩踏み出しました。つかん



防災士協会、防災対策課、くるめウスの協力のもと、防災を学ぶ講話、防災落語、防災グッズや避難食の展示。

入場受付 3密を避けるため施設外のみ予約制にして、検温や消毒などの感染対策ができる規模に。

## ポレポレ祭りって？

2002年秋より「祭りを通して地域とつながる」という目的でスタート。地域の保育園、小中学校などで構成する実行委員会を中心に企画運営し、毎年開催。東北・熊本の被災地からも参画。

## ■ 収支決算報告

※収益金は、災害に迅速に対応できるような備えや支援ができる費用として繰り越しました。

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
協賛	1,135,000	その他(お祝い・利息)	30,035
バザー売上	117,910	収入合計①	1,376,395
こども広場売上	32,450	消耗品	70,607
東北売上	61,000	通信・印刷・パンフレット代	78,730
		バザー材料代	68,947
		こども広場材料代	4,601
		東北仕入費	45,562
		収支差額(①-②)	940,195